



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4444 号 2018.6.16 発行

通算 4444 号記念号は、最近の LGBT 記事の特集号です。

LGBTや障害ある人らが「本」になり読者と対話 ヒューマンライブラリー

産経新聞 2018年6月13日

ヒューマンライブラリー

■無意識の偏見に気付く対話

難病、外国籍、LGBT（性的少数者）や体の障害。社会で誤解や偏見を受けやすい人々が「本」になって自分を語り、一般の「読者」と対話する「ヒューマンライブラリー」の活動が広がっている。「読者」は、いつの間にか悪意なく身に染みついた「無意識の偏見（アンコンシャスバイアス）」を省みることができ、「本」の人にとっても、誤解を解く気付きの場になっている。（津川綾子）

◆表紙で判断しないで

5月末、早稲田大学（東京）で開かれた「ヒューマンライブラリー」を訪れた。まず目に飛び込むのは「本」となる28人の「あらすじ（プロフィール）」を書いた掲示板。「四体満足」「恋愛感情を抱かないアセクシャル」「発達障害」「トランスジェンダー」…。つづられたキーワードがそれぞれの生きづらさを伝える。

借りる「本」が決まったら、読み手は「本」の待つ部屋へ。30分間の物語が始まった。

この日、「本」を務めた東京都の会社員、江守未奈子さん（24）は、20歳で脳出血で倒れ、右半身まひと言語障害がある。

一見、江守さんの障害は分かりづらい。つまり「表紙」は健常者に見える。

「車いすに乗ったりしていない、分かりづらい障害者の私が考えていることを明かすことで、そういう人もいるんだ、と気付いてもらえるきっかけになればと思った」と江守さん。

言語障害のため「会社では電話を取る仕事を控えている」という江守さんの告白に、「普通に話されているので驚いた」と、読者で参加した東京都世田谷区の女性会社員（24）。また「障害があると言うと、相手に気まずそうにされてしまい、壁を感じることもある」「障害をありのままに受け止めて生きていきたいが、どこかに見えを張りたい、健常でいきたいと思っちゃう自分もいる」という江守さんの正直な告白に、5人の読者がうなずきながら聞き入った。

◆ひとくくりではない

終了後、この女性会社員は「障害者やLGBTなどと言葉でひとくくりにして、その人たちを理解したような気になっていたけれど、それぞれが違う思いを抱えていることが分かったし、逆に私と一緒にだと共感する部分もあった」。



また江守さんの対話に読者として参加し、自らも右腕がない体で生まれた「四体満足」な日々を「本」として語った早稲田大4年、小泉菜緒さん(21)は「障害のことを伝えようと、気まずさのあまり『聞いてごめん』と謝る人がいる。でも、今回、本となって対話してみて、『ごめん』と言う人の側の気持ちも理解することができた」。

自分の「当たり前」は立場を変えれば、そうじゃない。「表紙」を見るだけでは分からない気が読者にも「本」になった人にもあるようだ。

■人が「本」と「読者」に 少人数空間で互いに理解

社会で誤解や偏見を受けやすい人々が「本」になり、一般の読者と対話をする「ヒューマンライブラリー」は2000年、デンマークで始まった。日本では平成20年、東大のある研究室が初開催し、以降大学を中心に行われてきた。

なぜこの取り組みが“偏見解消”に有効なのか。駒沢大教授時代に取り組み始め、現在日本ヒューマンライブラリー学会理事長の坪井健さんは、「少人数の親密な空間だから」。講演などと違い、個人と個人が向き合い本音で語ることが、お互いの理解につながるという。

坪井さんによると、今年は地域社会でもヒューマンライブラリーの開催が目立つという。「友達やご近所に気を使い合うような時代だからこそ、心のバリアを開放して触れ合う場が求められているのかもしれない」

くらしナビ・ライフスタイル 関学大で恒例LGBTイベント 多様なキャンパスへ語る 当事者50人記録映画上映

毎日新聞 2018年6月8日

LGBTをテーマにした映画について語り合う(左から)東ちづるさん、増田玄樹監督、長谷川博史さん＝兵庫県西宮市の関西学院大で、村瀬優子撮影



学内での多様性を認め合う環境作りを進めようと、関西学院大(兵庫県)が性的少数者(LGBTなど)への理解を呼びかけるイベント「関学レインボーウィーク」を続けている。今年は5月14～25日に同県西宮市内などの

3キャンパスで開催。当事者の学生による座談会や、女優の東ちづるさん(58)らが小中学校などでLGBTを学ぶ教材にしてもらおうと製作している映画の上映などがあった。

イベントは2013年に始まり、今年で6回目。座談会では、学内のLGBTサークル「CASSIS(カシス)」のメンバー4人が体験を語った。戸籍上は男性だが女性として生きるトランスジェンダーの学生(20)は「関学大を志望したのは、レインボーウィークなどでLGBTへの配慮があったと思ったから。学生証で女性の通称名が認められ、社会生活がしやすくなった」と打ち明けた。同性愛者の男子学生(20)は「僕も大学で初めて自分と同じ当事者と出会い、世界が広がった。信頼できる人に相談してほしい」と呼びかけた。

人権教育研究室長の武田丈教授(53)は「13年に始めた時には、座談会に参加してもらおう当事者を探すのに苦労したが、当事者の学生が率先して企画や運営に関わってくれようになった」と語る。こうした変化について「LGBTへの社会の理解が広まり、声を上げやすくなったのだろう。学外からイベントに参加する人も増えた」と歓迎する。

東さんが代表を務める一般社団法人「Get in touch」も参加。当事者50人にインタビューした記録映画「私はワタシ over the rainbow」(増田玄樹監督)を上映した。秋以降に劇場で公開予定だが、教材として編集し、希望する小中学校や高校に計1000枚のDVDを無償配布するという。

東さんは「性的少数者は身近にいないのではなく、見えていないだけ。なぜそうなって

いるのかを考えてほしい」と語った。出演した同性愛者の長谷川博史さん（65）は『LGBT』という区分ではとらえきれない、多様な性のあり方があると知ってほしい。セクシュアリティに悩む子供たちが自分を肯定するきっかけになれば」と期待を込めた。DVDの問い合わせは同法人（070・5467・0936）。【村瀬優子】

LGBT身近に感じて 滝川高放送局と滝川西高新聞局 当事者取材し番組／生徒の認識調査

北海道新聞 2018年6月15日

録音した音源を聞きながら編集する滝川高放送局の側さん（右）



【滝川】
同性愛者や、心と体の性が一致しないトランスジェンダー



ーなどのLGBT（性的少数者）について、滝川高放送局と滝川西高新聞局の生徒がラジオ番組や新聞を通して伝えている。国内では13人に1人がLGBTという調査もある。生徒たちは性について悩みを抱えやすい時期だからこそ「偏見をなくし、身近にいることを知ってほしい」と話す。

滝川高放送局は男性同性愛者のゲイと、他者への恋愛感情や性的欲求を持たない「アセクシュアル」の当事者計3人に、それぞれの性的指向や悩みなどをインタビューし、7分間のラジオ番組を制作した。番組は5月にNHK杯全国高校放送コンテスト空知地区大会のラジオドキュメント部門で最優秀賞を受賞。今月15日まで千歳市で開かれている北海道大会に出場している。

番組は局長の側（がわ）さくらさん（3年）が手掛けた。当初は「世間でも取り上げにくい問題に高校生が切り込んでいいのか悩んだ」という。それでも取材を通して、当事者の周りで相談できず自殺してしまった友人がいたことや、いじめられた経験を知り、「クラスでも悩んでいる子がいるかもしれない。番組を作ることで彼らに『一人じゃない』と伝えられた」と話す。

LGBT配慮の制服検討 ズボン、スカート選択 県内の特定公立校、来年度から

佐賀新聞 2018年6月14日

佐賀県内の特定の公立学校が、LGBT（性的少数者）に配慮した制服の導入を検討している。ブレザーを男女共通にし、スラックスかスカートを選択する案を協議している。白水敏光県教育長が13日、県議会一般質問で明らかにした。

県教委によると、県内には現在、性別に関係なく自由に制服を選べる公立学校はない。学校は2019年度の導入を検討している。検討段階であることや、学校側が導入を判断することなどを踏まえ、校名や小中高校などの区分、校数は明らかにしていない。

白水教育長は「制服の導入や見直しは本来、学校が生徒や教職員、保護者らから意見を聴取した上で適切に判断すべき」とした上で、自由に選べる制服の導入は「全ての児童生徒が自分らしく生きることができ、安心して学校生活を送る上で望ましい」と述べた。

さらに「男子は詰め襟、女子はセーラー服など性別がはっきり分かれる制服が、児童生徒にどのような影響を与えるか不透明な点も多い」と指摘、「各学校や市町教委に、性的マイノリティー（少数者）の児童生徒に配慮した制服などの検討を促したい」と話した。武

藤明美議員（共産）の質問に答えた。

ハラスメント、LGBT…日本のジェンダー教育に奮闘

ウーマンオンライン 2018年6月12日

「ジェンダーは社会的に構成された概念」だと知ること

「大学時代、日本の地方でインターンとして働いていたんです。その時、法科大学院（ロー・スクール）への合格を周囲に報告すると、喜んでくれると思いきや、『それは、結婚できないね』と真剣に心配されました。今でも印象に残っていますね。周りの日本人の皆さんはとても優しく、思いやりがあったからこそその反応だったと思うのですが、複雑な気持ちになりました」



その8年後——カロリーナ・バン・ダ・メンスブルグさんは、ニューヨーク州の司法試験に合格し、国際法や人権法を強みとするジェンダーの専門家へとキャリアを築いていた。そして今年の9月、新たなプロジェクトを手掛けるべく、再び日本へ降り立った。

カロリーナさんは、日本が大好きだというワシントン DC 出身の米国の弁護士

カロリーナさんはフェローとして、世界最大の人権団体であるアムネスティ・インターナショナルの日本支部で、ジェンダー教育プロジェクトに参画している。特に、ジェンダーを高等教育で

教える際のマニュアル作成に尽力しているという。

LGBT への偏見や差別、セクハラがまだある日本で必要なのは

日本ではつい先日、勝間和代さんが自ら、LGBT アクティビストの増原裕子さんとの交際を公表し、「LGBT のカミングアウトには勇気がある。それこそが、偏見や差別が残っている証しだ」とも語り、話題となった。また、女性記者による財務省前事務次官のセクハラ告発では、ハラスメントに声を上げる#MeToo が広がりを見せ、職場で起きているセクハラやその深刻な影響が共有されるようになった。

平等なジェンダー意識を持つことの解決策としてよく提示されるのが「若いうちからの教育」だ。先月まとめられた、内閣府の男女共同参画会議の重点取り組み事項にも、「学校現場等におけるいわゆる『アンコンシャス・バイアス（無意識の偏見）』への対応」が盛り込まれ、無意識に男女の役割に対する固定的な価値観を与える「アンコンシャス・バイアス」に対して、特に学校現場において、その解消に向けた取り組みを進めるべきだと、提言された。文部科学省でも男女共同参画社会やジェンダー平等を推進する重要性は議論され、特に教育プログラムについては、NPO セクターの役割が期待されている。そのニーズに応える現場に、カロリーナさんはいる。

「今は、作成中のジェンダー教育のマニュアルが、現場の高校で実際に使えるものかどうかテストするため、28 歳以下の人を対象にワークショップを実施しています。ジェンダーや性の考え方について安心して話せる場所を求めて、全国から参加者が集まっています」

私自身は 15 年前、中高時代を日本で過ごしたが、「ジェンダー」という言葉すら聞いたことがなかった。アメリカ留学時をきっかけに LGBT の友人や知人も増えたほか、自分が「女性はこうあるべき」と生き方や働き方について囚われてしまう背景には、自身のジェンダーに対する無意識なステレオタイプがあることも知った。今は身近な問題として認識し、関連ニュースや研究を追っているものの、そもそも教育の現場で、ジェンダーについてどうやって語ればいいのか、カロリーナさんと話すまで想像もつかなかった。

ジェンダー教育での重要なポイントは、「ジェンダーは社会的に構成された概念である」と理解することだという。

「ジェンダーは社会的に構成された概念」だと知ること

「例えば私たちが『女性だから』『男性だから』と特定の性別と結び付ける行動や好みというのは、決して生物学的に、もともと存在していたものではないですよ。女性がピンク・男性が青、女性は家庭・男性は仕事、といったような考え方や感覚は、歴史の変遷の中で社会によって構成されたものだ」と説明します。とはいえ、最初は参加者もピンとこないもので、いろいろな国の挨拶を例に挙げます。

例えば、日本では会釈やお辞儀、アメリカではハグ、またフランスではキスをします。日本で挨拶としてキスをしたら相手に驚かれるけど、フランスでは普通に受け入れられる。つまり、絶対的な挨拶の仕方はなく、それぞれの国で長年にわたってつくられてきたマナーや礼儀なんです。社会によって、何が『普通』なのか、が決められている。こうした説明をすると、参加者たちはイメージが湧くようです」

このように、男性であること、女性であること、LGBT であることが、いかに社会に定義づけられているかを話し合うセクションは、参加者にも人気があるという。

セクションでは、それぞれのジェンダーに対するアイデンティティーのステレオタイプが狭い場合、それに適さない人がどう感じるかというテーマで議論したり、日本の広告に存在するジェンダーのステレオタイプを発見して広告からステレオタイプを取り除くという実践的な演習も行ったりする。

「このような演習をすると、日々、日本で触れているメディアでは、女性が『主婦』、男性が『サラリーマン』で描かれている傾向が見えてくるんですね。参加者たちは、今の自分の家族や友人の状況と比較し、広告をどう感じるか話し合ったり、広告に、LGBT の登場人物を入れるべきだという提案もしたり。

このような演習の目的は、社会における特定の立場や役割を批判することではなく、その立場や役割の捉え方を広げることです。ジェンダーのステレオタイプがあまりにも狭い

と、個人や社会の可能性を潰してしまう危険がありますから」

ジェンダー教育での重要なポイントは、「ジェンダーは社会的に構成された概念である」と理解することだと、ワークショップで伝えていく

自分たちにもジェンダーのステレオタイプによる悩みはある

話し合いを進めていくと、参加者自身が持っているジェンダーのステレオタイプによる悩みを口にするケースも多いそうだ。

「男性の多くは（若い人でも）、自分が稼ぎ主にならなければいけないプレッシャーを口にします。また、女性参加者の中には、自分の母親のような専業主婦にならず、仕事を続けることを選んだら、親が選択したその当時の『あるべき姿』を批判するような気がして申し訳ない、と話す人も。期待されているジェンダーの役割に当てはまらないと、周囲を落胆させるのではないかと、という不安の声もよく聞きますね。

ワークショップではさらに、レズビアン・バイセクシャル・トランスジェンダーの人は、性別とアイデンティティーの理解を得られず、差別を受けやすいことも説明してみんなで考えていくのです」

ジェンダーを人権という視点から考えることも、教育において重要なポイントだ。

例えばワークショップでは、職場のハラスメントについて、何がハラスメントに当たるのかを挙げた上で、それに対応する国内の法律や国際法の基礎知識やハラスメントが起きやすい環境やポイントを共有して、実践的なケース・スタディーを実施するという。このケース・スタディーでのシナリオは、例えばこんな設定だ。職場で女性の部下が男性の上司からセクハラを受け、不快であることを本人に伝えたが、改善されなかった。周囲に相談すると、社内の調和を乱していると上司と同僚から疎外され、結果的に辞めてしまった





国際基督教大学でのワークショップの様子。参加者のさまざまな意見が交わされる

このような具体的な事例をもとに、何がハラスメントなのか、周囲の反応はどうか、細かく分析する。すると、ハラスメントが起きる力関係の構図や環境が具体的にイメージできて、効果的だとカロリーナさんは言う。「このケース・スタディーをすると、参加者は男女問わず、被害者である女性の責任を問い、加害者の上司に寄り添う傾向があるんです。

互いの経験を共有して、立ち止まり、自分の考え方を見つめ直す

『女性側が不快であることを伝えきれていなかったのでは』『上司は円滑に仕事を進めようとしているだけだからしょうがない』という意見も多く出ます。一方で、自身も痴漢被害に遭って警察に助けを求めたら、服装が挑発的でなかったかなど、その当時の容姿について細かく説明を求められ、とても傷ついたという経験を共有する女性もいました。

このように、ケース・スタディーや互いの経験を共有することを通して、いったん立ち止まり、自分の考え方を見つめ直す機会は重要です。ハラスメントについても、若いうちから包括的に、構造的な社会問題として考える視点を養う必要性があると感じています」

カロリーナさんは、ワークショップは、参加者に「問い」を持ってもらうことが目的の一つだという。これまで言語化して考えたことなかった問題や視点について、思考を深め、現状を「問う」きっかけの第一歩になる。

若いうちからジェンダーについて学ぶことで誰もが生きやすい社会をつくっていきたいという強い思いで、カロリーナさんはこの仕事を選んだ。



ジェンダーを専門に、国際法や人権法の視点から、世界各地の人権教育プログラムの開発や人権状況の調査に取り組む

「日本で、人権団体に働いていると言うと、ラジカルな人だと思われることもよくあります。でも、ジェンダー教育においては、NPO セクターや人権団体だからこそ、提供できる貴重な知識や経験があります。現場の教育者や教育委員会が、ジェンダーのカリキュラムを考えたいと思っても、ノウハウがないことや、日々の業務に追われていて、十分な時間が取れていないのが現状です。そのような状況があるからこそ、文部科学省もNPOセクターによる教育プログラムの充実を、期待を寄せているのだと理解しています」

カロリーナさんは、ワークショップや現場の教育者や生徒からのフィードバックを重ね、ジェンダー教育の教員マニュアルの開発を進めている。そのマニュアルが、文部科学省のガイドラインとどう連携しているか、白書を出す予定だという。

福岡市天神でLGBTの就労セミナー 15、16日に講演と個別相談会【福岡県】

西日本新聞 2018年06月12日

性的少数者（LGBT）の就労について考えるセミナー（西日本新聞社主催、福岡市後援）が15、16日、福岡市・天神の西日本新聞会館で開かれる。LGBTの就職支援に取り組む企業「笑美面（えみめん）」（大阪市）で、心と体の性が異なるトランスジェンダーであると公表して働いている北川わかとさんが講演し、個別相談に応じる。無料。LGBTは人口の8%程度を占めるとされており、公表することで職場でいじめの対象となったり、就職活動への影響を懸念したりする当事者が多いという。西日本新聞社は、暮らし全般の相談に応じる「生活の窓口」事業の一環として、今後、LGBTの相談に応じる。セミナーは、15日午後1時半と同日午後7時、16日午前10時半の計3回開催。それぞれ約1時

間。各回先着 20 人で事前申し込みが必要。西日本新聞「生活の窓口」=092 (752) 8150。

自民党 LGBT理解へ法律の必要性訴え

毎日新聞 2018 年 6 月 13 日



LGBTへの「理解増進」を訴える自民党の稲田朋美衆院議員＝東京都千代田区で2018年6月13日午後3時42分、藤沢美由紀撮影

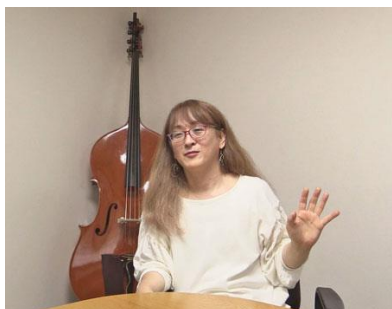
自民党と連携してLGBTなど性的少数者への「理解増進」に取り組む一般社団法人LGBT理解増進会が主催するシンポジウムが13日、東京都千代田区の経団連会館で開かれた。自民党の「性的指向・性自認に関する特命委員会」のメンバーらが登壇し、約150人の参加者を前にLGBTへの理解を促進する法律の必要性などを訴えた。

シンポで稲田朋美衆院議員は「LGBTの問題は人権や尊厳の問題で、保守もリベラルも関係ない。五輪も控えているのに与党が真剣に取り組んでいないのは恥ずかしい」と指摘した。

宮川典子議員も、党内の会議で「なんでこんな人たちのために法律を作るんだ」などと差別発言が相次ぐ現状を紹介しつつ、「理解を増進し、差別を根こそぎなくするのが夢」と訴えた。

LGBTを巡っては、野党や当事者団体が「差別解消」や「差別禁止」をうたう法律の実現を目指している。これに対し、同委員会の委員長を務める古屋圭司衆院議員は「罰則規定や同性婚、パートナーシップ制度にはくみしない。あくまで理解増進に努める」と述べ、次期以降の国会で「理解増進法」の成立を目指すとした。【藤沢美由紀】

音楽家として本当に伝えたいこと 京響のLGBT奏者に聞く



京都新聞 2018 年 6 月 6 日

「議論を尽くして、それでも来てほしいと話がまとまった時は、喜んで川本町に行きたい」と話すアイデアラさん（京都市中京区・京都新聞社）

京都市交響楽団のコントラバス奏者でLGBT（性的少数者）のジュビレーヌ・アイデアラ（本名・出原修司）さんが出演し、島根県川本町で9日に開催予定だった演奏会が、案内ポスターの文言を巡る騒動から中止された。「音楽で町おこしを」という地元の思いに応え、今年3月で廃線となったJR三江線と川本町に取材し、アイデアラさんが作曲

した楽曲を当日に披露する予定だった。「おネエ系」という文言の賛否を超えて、ひとりのクラシック音楽の演奏家として本当に伝えたいことを、京都新聞の単独インタビューに語った。

■「LGBTが問題ではない」

—今回の演奏会が中止に至った騒動を、どのように捉えているか。

楽しみにして下さっていた方々に、申し訳ない気持ちでいっぱい。演奏会の中止は、LGBTが問題ではないと考えている。企画の発案から準備までに十分な時間をかけることができず、私の音楽性について十分に知ってもらうことができていなかった。

地方にも良い音楽ホールはあるが、何をやっていいかわからない、どうすればいいかわからないという課題が少なくない。演奏会を企画するプランナーや関係する自治体が、じっくりと時間をかけて考えるプロセスが重要だ。川本町は3月にJR三江線が廃線となり

「何か手を打って、人を集めなければ」という焦りがあったのかなとも思う。それが原因で直前で混乱を招いた。「おネエ系」というポスターの表現をめぐる議論がきっかけではあったが、問題の中心はそこではない。町のため、聴衆のためにどのような公演を行えばいいか、どんな演奏家を招けばいいか。みんなでじっくりと考え、同じ方向へと進んでいくことが大切だが、今回はそのプロセスが不十分だった。

■それでも、また新しいことがある

—新曲「鉄橋と彩雲と、ぼく。」に、どのような思いを込めたか。

JR 三江線の最後の日の3月31日に、カメラを手に列車に乗った。沿線の江の川の流れて、青というか緑というか本当に美しく、曲のメロディや雰囲気はすぐに浮かんだ。けれど、6月の演奏会の時、この曲を披露する時は鉄道は走っていないんだな、ということがものすごく切なく感じた。鉄道を作った人たち、列車に乗って学校や仕事に通った人たちの思いを曲に乗せたいと思った。

曲に合わせて沿線の景色を撮影した動画を編集し、1カ月ほど悩んで作った詩を添えた。鉄道はなくなったけれども、これからどんどん新しいことがあって、町はまたにぎわっていく。そのとっかかりとして、私が曲を演奏するから、みんなで元気出していこうよ、という気持ちで作り上げた。

だから中止という判断はすごく悲しいし、この曲を演奏したい気持ちはある。ただ、そのためには、それなりの準備が必要だろうと思う。私が行くことで混乱が起きるような状態で演奏会を開くのは、好ましくない。少し時間をおいて、十分な議論を尽くして、それでも「ジュビちゃん、来てほしいね」と話がまとまった時には、喜んで川本町に行きたいと思います。

LGBT へ理解促す NPO 会長、滑川さん講演 「少数意見、尊重を」 竜ヶ崎南高

茨城新聞 2018年6月11日



多様な性の在り方について講演する滑川友里さん=龍ヶ崎市北方町の県立竜ヶ崎南高校

同性愛などの性的少数者(LGBT)について知ってもらおうと、龍ヶ崎市北方町の県立竜ヶ崎南高校(菊池紳一郎校長)は5日、NPO法人「RAINBOW 茨城」の会長、滑川友里さん(31)を講師に迎え、講演会を開いた。滑川さんは「男と女だけでなく、いろんなセクシャリティーがある」と性の多様な在り方について話した。

NPO 法人は、水戸市出身でレズビアンを公表している滑川さんを中心に昨年11月に発足。講演会などを通して LGBT への理解や認識を深めることを促している。

講演会で滑川さんは、LGBT について「産まれた時の性別」「心の性別」「好きになる対象」の違いで分かれることを説明。心と体の性が一致しない「トランスジェンダー」と「同性愛」は同じではないとし、「(心など)目に見えない部分を大切にしてほしい」と訴えた。

さらに、日本人の13人に1人はLGBTの当事者であるとする統計を紹介。「いじめられたり、はじかれたりするのが怖くて言えないだけ」と身近な存在であることを強調した。

また、少数者の意見や存在を尊重することの大切さにも触れ、「少数派の気持ちも考えてみてほしい」と呼び掛けた。講演会には同校の生徒や保護者など約350人が出席し、熱心に耳を傾けた。(松原英美)



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行